



目次

▲論説
新春雜感

▲調査
安藝小林區署概況

▲隨筆
セントセリムス島に移された記

▲文苑
フガキにて

▲雜報
學校便り

▲會訊
大會記事

▲その他
會員消息

第百二十號 大正八年二月廿五日 明治四十四年四月十四日 第三種郵便物 第四四日 每星期一發行

論評

新春所感 宇志生

乾坤絃に新に屠蘇の香薫る芽出度年頭に於て等しく其雰圍氣中に景氣の好ささうな顔をなし喜びの聲を揚げるのは立國以來の慣習で一休の如く此時殊更に警告非議するのは、寧ろ奇に失する行動であるかも知れない、况や凡俗中の凡俗漢が、芽出度かりける新春初頭に於て、蚊の如き聲を絞つて覺醒を促すが如き文句は嘲笑すべき事であるのは、自分としても百も承知であるけれども酒後の娛として敢て一讀を煩はしたのである。

虎熊争へる間に於て、猿は時ならぬ御馳走に有付いた、金貨てふ最も甘い果實は、十五億も熊に加勢して、僅かの力なり傷を負つた計りで與へられた、更に休心地なき、青島南洋の小屋も、此猿のものになりさうだ、猿にても幸福な次第である。然るに此猿は今迄に見ることもなき甘き果實を飽食して、其の或者は成金病に侵されある者は満腹不消化病に侵されたのである。然るに猿智慧によつて歐米の真似する淺薄なる文明は、虎熊の鬭争中兎も角も、虎熊にあらざれば能はざるものとせられたるものに迄猿智慧を以つてかち得たのである。其の前路を避けず其の背後を嚇すものなき群猿は、満足と得意との頂上に達した、支

那の豚も牙の欠けた衰弱せる露の山犬も、一舉にして掌中にありと心得た、米熊は戦ひ乍らも此事態に、少なからざる嫌厭の眸を凝らさざるを得なかつた。

茲に於てか有識の群は、事態重大の時期に際し勃然として蹶起し内閣てふ高臺から金猿の覺醒を促し、所謂戦後の方策を樹立せんとしたのである、然し其時期中、己に遅し未だ何等の準備も劃策も樹たず、之を賛する群猿の中に祝酒の香に、酔はされて居る間に、卒然として虎熊の争ひはたこやんだ。

猿は之からどうするか、如何すされよか選ばれたるものが、群熊の間に伍して虎共の勝敗を議すべく出發した恰も謎の様な事態の間に、大正八年も廻轉し來つたのである。

諸君國民の一員としては、勿論今後の方策に就て考ふべき必要がある、然し茲に吐露するの要はない、唯吾人の關連せる業務の將來に就ては、其外廓丈でも又時勢の現況だけでも確めて置く必要があるではないか、今私は私の考へた範圍に於て、其主なる事項に就いて、論題を提供し、諸君と共に講究し合いたいと思ふのである。

一、製紙原材料の將來
今は己に樺太だけが、バルブの豊庫である、十萬噸の産出があり更に増加するに違ひないが、紙は益々需要を増す計りで

ある。他の物價に比しすればしき騰貴率を示してあると製紙會社のある重役は云つて居た、價額暴騰のために先第一に起るべきは紙騒動でなければならぬ。然るに日常の常食でない爲に、人々更に怪しまないのである、各地に藁其儘を原料とする製紙會社も到底バルブを混せざれば立つてはゆかれないのである。

更に紙系紙の織物は、非常な勢を以つて流行普及しつゝ、ある、羽二重も見擬ふ艶な廉價な紙織は必ずや、將來大發展を來すであらう、如何にして原料の保續を計るか、以上の事實は言語に活字に屢々散見するが、今後の方策に付いては未だ寡聞なる余等は聞いた事がない。北海道も樺太も今から合理的な天然更新によつて、將來ある程度迄供給を確保するであらうが、欲する全部を供給することは覺えないと思ふ、やはか巴に西伯利亞及滿洲方面に於ける大森林の利を獲得せんとしつゝある其手段方法に期待しなければならぬのであらう、從つて内地に於ける製紙用材増殖の如きは、考へる迄の餘地もない事と信ずる。

二、木炭の將來
▲戰亂以來の需要激増したることは争はれない、例之其統計にして不完全なりとは云へ、大正元年に二億七千萬貫のものが大正三年に三億萬貫となり大正五年に

は三億五千萬貫に増加し、大正六年には一億四億五千萬貫に激増してゐるのである即ち大正三年に比し、二億五千萬貫の増加は自然増加でなく、全く工業の勃興に伴ふ需要の増加である、然るに戰争終結後の状態を推測すれば、第一石炭の下落第二製鐵事業の縮小、カーバイド、火薬製造の減少、第三泡沫會社の衰滅に伴ふべからざる定評である。

▲更に恐るべき木炭代用品は、非常な速力を以つて普及しつゝあるのである、亞炭製の木炭は己に新炭、製炭二會社の組織によつて五貫一俵四十錢内外の廉價に市場に供給せられて居る、又鋸屑並に粗殼の利用は到る所に行はれて、其黒滓は炭團として利用せらるゝではないか。

▲又更に電氣の應用は、ごしん、ご木炭の御華客を奪ひつゝある、曰く電氣コンロ、炬燵布團更に蒸氣釜(櫃中に蒸氣を通じ飯を製す)、に及んでゐる。

▲前記の如く木炭需要の減退は急激でないにしても、當然來るべき趨勢である、之に公設市場の設置、經濟思想の發達普及による直接取引の増加、漸落氣配の買控等は益々其下落を促すに違ない。

六、伊尾木林道
伊尾木林道トハ伊尾木土場ヲ起点トシ東川村島ノ内若荷ニ終ルニ二哩三ノ本線ト西ノ川支線六六二間(〇哩七五)ヲ軌道ヲ稱スルナリ明治四十三年度ニ始メテ東川村大字自大井字杉至古井字加勝谷ヲ開設シ四十四

開設年度	ケ	所	巾尺	急	配
四三、四四	自	大井	六	133	三
四四	自	古井	六	160	三
大正、三	西ノ川支線	六	127	三	三
三、四	自	海岸	六	130	三
五、六	自	島	六	115	三
合計				115	三

井島間大正三四年年度ニ海岸大井間及西ノ川支線ヲ開設シ大正五六年年度ニ本線ヲ若荷迄延長シタリ其開設年度延長及經費ヲ示セバ左ノ如シ

延長	經費
三八〇九、四	三三五六三、五四〇
二〇九六、八	一七六八八、九一〇
六六二、	三二二四、五〇〇
九九五〇、六	七四九一九、八五〇
三〇〇〇、〇	二一〇九八、一四〇
一九五一八、〇	一五五三五、〇四〇

年度ニ古本支線共二間ニ枕木平均二本七分ヲ使用スニ年乃至三年毎ニ取替ヲ要ス一本ノ價取替費用其從來廿五六錢ヲ要シタリ今後ハ卅四五錢ヲ要スベシ其他橋梁棧道ノ修繕石垣ノ築替土砂ノ取除等ノ維持費用全線開通セザル五年度ニ三千五百圓六年度ニ四千五百圓ヲ要シタリ然レニ本年度ニ至リテハ全線開通シタルヲ以テ漸次維持費用増加シ來リテ約八千二百圓ヲ要スル見込ナリ。

運搬ニ從事スル、トコ、乗夫ハ皆地ノ民ナリ目下、トコ、約八十臺アリ、トコ、ハ官給ス壹臺目下約八十圓外内ナリ壹臺ノ載積

量材木ハ十二石(壹石トハ十立方尺)板ハ四十八坪(六分板)木炭ハ四十二俵ナリ本年度内搬出豫定量板約壹萬坪炭約壹萬四千俵材約七萬石ニシテ此所要經費約壹萬七千圓ナリ。

七、造林
林區署時代ノ造林地ハ現在一五八四町七反八畝歩ニ上リ其植付本數杉三百十萬本扁柏三百九十萬本杉挿木二萬本樺二萬本合計六三萬本ニ達ス林區署時代ノ造林ハ明治廿六年度ヲ始メトシ爾來年々伐採跡地ニハ必ず植付ヲ爲シ植付ノ翌年補植ヲ爲ス近來ハ成績良好補植ヲ爲スニ及ハサル所アリ凡五年間雜草木ノ刈拂ヲ爲シ後二三年ニシテ蔓切ヲ爲シ植付後十三四年林地ノ閉鎖スルニ至リテ枝打ヲ施シ林木ニ優劣ノ差ヲ生スルニ及ンテ間伐ヲ施行ス近來ノ造林面積ハ年々約八十町歩ニシテ補植手入枝打間ノ經費ヲ合スルトキハ八千圓内外ニ上ル。

て見苦しい事夥しい。
▲今や時勢は對内策に腐心してゐる場合は勿論なく然し少なくとも經濟上に於て將産業上に於て、基礎ある確固の國策を樹て、官民國縣相策應してその實行に邁往し對外的場合に一の懸念をもあらしめざる決意がなくてはならない。

調査
安藝小林區概況(承前)

五、伊尾木土場 小崎次郎
伊尾木土場ハ伊尾木村ノ海岸伊尾木林道ノ起点ニ在リ明治四十一年以來本土場開設前迄ハ伊尾木村區有地ヲ借入シ土場ニ使用シ居タリ大正三年度末本土場ノ設置ニ着手シ大正四年度ニ至リ完成シタリ此經費土地買上代共二、二九六圓土場ノ面積三町九七一歩中二、棟四十坪ノ杉皮普倉庫六棟及事務所一棟ヲ建テ板類木炭ハ倉庫ニ收容シ材木ハ野槌ニテ貯藏保管ス本年度ノ収容量ハ板材約一萬坪木炭約一萬四千俵材約九萬石ノ豫定ナリ而シテ之ガ貯藏保管ニ要スル經費ハ(主トシテ人夫賃ナリ)約四千圓ナリ。

若クハ民間ヨリ買入レ居リシモ當地方ニハ
民間ニ苗木商ナク遠方ヨリノ輸入苗木ハ植
付後ノ成績不良ナル結果ニ鑑ミ先年來川北
村ニ壹反四畝歩ノ苗圃ヲ設ケ此處ニテ所要
ノ苗木ヲ養成スルコト、ナセリ而シテ昨年
度ヨリ自給自足ノ目的ヲ達成スルコトヲ得
タリ尙植付ノ前年山元ニ於テ一ヶ年養成ス
ルトキハ獨リ運搬費ヲ節スルノミナラズ苗
木ガ風土ニ慣レ活着良好ナルニ願ミテ一昨
年ヨリ西ノ川山國有林内ニ約八反歩ノ苗圃
ヲ設置シ川北苗圃ニテ養成シタル二年苗ヲ
此ニ移シテ二回床替ヲナシ一ヶ年養成ノ上
山地ニ植付クルコト、ナシ居レリ亦所要種
子モ地方産ノモノ成績可良ナルヲ以テ一昨
年ヨリ當地方ニテ採集スルコト、ナセリ現
在川北苗圃苗付ノ扁柏杉樅ノ種子ハ皆管内
國有林又ハ民林ニテ採集シタルモノナリ只
健全ナル樹齡ノ適當ナル母樹少ナキヲ憾ト
スルヲ以テ今後ハ伐採ニ當リテ母樹ニ適當
ナル樹木ナルトキハ力ヌテ存置保護スル方
針ナリ

八、巡視歩道

保護經營上ノ必要ニ基キ開設シタル巾二
尺ノ歩道ナリ林區署創設以來明治四十年頃
迄ハ緊急ノ事業忙シク歩道迄ニハ手ノ廻
リ兼ネテ自然夫迄ハ荆棘ノ中猪鹿ノ跡ヲ追
リテ跋涉巡視セザル可ラズサラスダニ嶮山
峻岳實ニ蜀道以上ノ行路難ニ加フルニ荆棘
雜草中ノ跋涉ナリ勞苦警ヘン様モナカリシ

んには船無し飛ばんには翅なし嗚呼萬事休
す
一方此の事を知つた英國官憲(此島の頭長)
は憤面朱の様拾數名の銃劍兵を引連れて押
寄せた將に修羅の巷が開かれんとしたけれ
共我に武器なし反抗すれば徒に貴重な一命
を捨てるのみ此處で斯様な事に一命を捨て
るのは犬死だそんな愚な者は一人もない一
同は鳴る腕を押へ憤をこらへて銃劍兵に護
衛されて元の所へ歸つた要所々々には銃劍
兵が立つた。
無法なる裁英國官憲否白人確に此の東洋人
此の黄色人此の日本人を侮辱してをる汝今
安全な我が大日本帝國を同盟國に持つた
が爲めではないか然るに此の大日本帝國の
良民をして此の壁のないコンクリートの家
に而も薄い少い毛布壹枚で寝よとせよ
午後の四時頃食料品を興へた南涼米に雑
物多い岩鹽副食物としては夕顔南瓜の數個
馬鈴薯若干のみ食器としては一人に皿一枚
箸一本湯を沸かすの器としては鐵製の直徑
一呎半高さ三呎位の器飯と菜を作る爲めに
は内地で油揚を作る様な浅い口の開いた直
徑三呎位の鍋と釜とを判らぬもの二個を
興へたそして自炊せよと是を見是を聞た一
同は又怒つた然し一同は此の時飢餓に迫つ
て居た何れも上陸してから船中のまづい
朝飯には手も附けなかつた其上此島の來
て此の騒て晝飯もせず此の上食はねば徒に

カ爾來事業ノ進歩發展スルニ從ヒテ當署ノ
如キモ明治四十一年以來年々歩道ヲ開設シ
現在ハ其延長六萬六千間ニ達シ保護經營上
ノ便益云フ可ラズ(國有林町歩ニ對シ延
長約十間半ナリ)外ニ橋梁四ヶ所アリシガ
島部落ノ一橋ハ過日ノ暴風雨ノ際木材ノ突
破スル所トナリ墜落流失シタリ上記橋梁
中ノ三ヶ所ハ孰レモ國有林外ニ在リテ自然
普通ノ里道全様一般ノ交通路トナリ居レリ
本年度新設豫定歩道ノ内島ノ尖ヨリ若荷谷
ヲ渡リ別役ノ影野ヲ經テ日浦ニ至ル約三千
四百間ノ一線ノ如キモ亦國有林外ニ在リ開
道ノ曉ハ島別役間ノ交通上至大ノ便益ヲ享
クルコト、ナルベシ蓋シ一般通路ノ不完備
ナル爲メ國有林内ノミニテハ其ノ目的ヲ達
スルコト能ハズ自然如此ニ迄之ヲ延長スル
ニ至ル次第ナリ(丁)

隨筆

セントゼームス島に移された記
シンガポール 古根 動
五月拾九日思ひがけなくも事務長の言葉に
詮方なく吾等三等船客八拾有餘名は英國ラ
ンチに乗り移つた船は靜に渡を切つて一小
孤島に向つた。
縁の島其美しい島には赤い屋根が見ゆる
誰やらが云つた「あれは公園らしい矢張英
國人は偉い吾々をあんまり美しい公園へ連れ
て行つて消毒するんだから」と
近寄るにつれて判明となつた周圍は一里に

飢死する許り詮方なく上陸せよとて着た
新しい美しい着物や洋服帽子靴等を眞黒に
して炊事に努めた時餘上部は附の様で心が
あり下部は眞黒に焦げたのが出來た空腹の
一同は沈黙のまゝ腹を作つた。
夜は八拾幾名に煤けたランプ唯一つを興へ
たのみ新嘉坡の電氣がよく見ゆる銃劍兵は
依然立つて居る蚊軍襲來其の夜は碌々夢も
結ぶ事が出來ずうと／＼する間に早や東の
空は明るくなつた何處よりか雞の聲がした。
七時頃赤面の傲慢な態度の毛唐が點呼に來
た安心してか歩哨を去らしめた然し數名の
巡查は少しも離れない
でも晝飯としてパン三片とバター少々と興へ
たのは何よりだ一時頃郵船會社から消毒す
るとして我々の荷物を送つて來た吾等も消毒
するとして消毒所に導かれた消毒所其は名許
りまるで動物園の様であるタキにトタン
屋根に鐵の柱壁の代りに鐵條網を張つてあ
る家の片隅には一間に五間高さ四呎位のタ
ンクが置かれてある一同は其の家の中に整
列させられた入口には巡查が番をして居る
點呼が終ると赤裸とし南京袋で作つたかど
思はれるサロ(土人の腰に纏ふもの丈四
呎に直徑三四呎の布製の筒)一個宛真へて
腰に纏はしめた急に白色土人の一隊が出來
上つた順次片端からタンクの消毒劑の中へ
頭から飛入らせた再び整列の上乗船地名を
問うた中に香港で乗船した者が數名居た彼

も足らぬ其所には内地で見る事の出來ない
熱帶植物が生茂つてをつた二三の洋館が
らほら木の間に見ゆるランチは棧橋に來た
印度人の巡查數名は早速我等を島の中央の
小高い所に導いた其處には前に見た赤い屋
根の家があつた然し壁はなく床はコンクリ
ートで作つてあつた其の家には番號が記せ
られ周圍には鐵條網さへ張つてあつた一同
の心の奥底には一種の疑惑の念が起つた
巡查が何やら云つた南洋へ二度目である
云ふ馬來語の出る女に聞くと斯うだ「た前
等は此の家に一週間寝るんだとして其の中
に傳染病が一人も無かつたら上陸を許さう
一同は英國官憲の無法なのを憤つた郵船
會社の無責任を罵つた總ての人は殺氣立つ
て來た眼を海上に注げば帝國軍艦は二隻巍
然と控へて黒煙は高く天を突いて居る靜岡
丸は今徐に新嘉坡の棧橋に向つてをるヤレ
と一人が叫ぶと殺氣漲つた一同は一齊に韋
駄天の様に棧橋へ向つて鯨波の聲を上げて
狼狽した巡查は棍棒を打振つて之を遮斷し
ようとした彼は六尺有餘の大男此方は五尺
に足らぬ小男けれ共此方に大和魂がある止
めんとする奴を片端から突き除け蹴飛ばし
た走り上つて棧橋についた一同はどつと
勝鬨を上げた而して軍艦と靜岡丸に向つて
聲を限りて救を呼んだ然し答ふるものは寄
てせば返す浪の音ばかり身に覺ゆる者は
手旗信號を始めた然し之も空しかつた渡ら

等は乗船地迄歸る様に命せられた
吾等の衣類帽靴は皆蒸氣に或は硫黃瓦斯に
依つて消毒された荷物は勿論である爲に破
損したものも少くなかつた上等の衣類がポ
ロポロになつて泣く女靴やトランクが滅茶
滅茶になつて怒る男一同の憤は愈増した毛
唐は是を察してかたごした「今汝等が騒ぐ
と彼の數名の者同様乗船地まで送返す」と
何か爲すことなくてやばと雄々しく多くの
人に見送られて昇天の意氣で故國を後にし
た人々の今ため／＼歸られもせねば憾をの
んで後五日許一週間を此のセントゼームス
島に流罪人生活を續けた遙々海波幾千里を
乗り切つて漸く目的地に來てやれ嬉しやと
云ふ間もなく其の目的地に上る事も出來ず
其れを眼前に見ながら一小孤島に流罪人扱
將病人扱されようとは……
然し天の神は我等を捨てず一週間は過ぎた
が一人の病人も出なかつた漸く解放された
總計八拾有餘名の欣喜雀躍例へんにものな
く此の一週間の生活を修養の一端話の種と
してシンガポールに躍り上つたとして各自
目的の方面に向つて袂を別つた(丁)

◆ ◆ ◆

自分は生來文を書く事が出來ない併しこん
なものでも暇つぶしに讀んで海外へ出る人
間が如何に白人に侮辱されつゝあるか又如
何に日本人の勢力が振はないかと云ふ事が
少しでも想像が出來れば自分は此の上もな

た丙「あら、原木さん真青な顔して何を怒つてらつしやるの。また例の奥様のことなんぞせう、オモイモイ察し申しますよ、先刻もオモイ腹が立つて腹が立つてならなかつたんですよ、『お前の料理は水臭くてチツトモ味がない、お前の舌は何の爲にあるか知つて居るか』なんて仰つしやるんですよ、其くせ御自分で御飯を炊いた時には松茸飯がまるでお茄子の雑炊の様だつたよ、ホ……それからオモイ原木さん、いつか鴨川さんとか云ふ音楽の先生の悪口屋がいらつしやつた時の鰻の蒲焼御存じでせうまるで消炭の様ねでも旦那様はあれをよくもオモイ平氣で召上つて居りましたよ。

決心したのだがお前はモット辛抱する氣かね……」
た丙「いや、妾も真平よ、一刻だつて務まるものですか、それに原木さんが……あれ……早く早く(緑女史の足音兩人キツトなりて退場)

コレランブとハカリを持って勝手に退かんとして立上り乍ら時計を眺めア、もう三時十分過ぎだよ、何時だつて時間通り歸つた例はない。あれ程出る時約束して置いたのに何處を歩るいて居るんだらう。今日こそは許しませんから。いくら監督を厳しくしても男つて何處まで呑氣か解りやしない妾に對する愛情があるならばモット、バツチユアリにすべき筈だよ(少し苛々した面持にて退場)

い満足である。此處に書いた事も事實はもつと(一)甚しい(一九一八、二二、二五、記) ハガキにて 越 畔 東京へ来てから既に數人の校友に遭つた。又卒業生名簿を見ると我校友在京者は優に十數人を算する、夫れに公私の用で出京する者も多々ある。茲に於てか切に蘇門會開設の急を思ふ。現んや林友に現はれざる諸氏數あるに於てを、僕の知れる者にて共濟生命の角田氏、農大の野中氏、早大の長谷川氏などがある。余は地方蘇門會の聲を聞くことに愈々羨望に堪へぬ。それ舊友相會して一夕の宴を張る亦樂しからずや。在京諸兄以て如何とす。

今上陛下の聖徳に感涙し、併せて國家の前途を大いに祝すべきなり。此の光榮ある新春を迎ふると共に、更に新銳の氣を鼓して一大勇躍を試みざるべからず。幸ひ校友諸兄！精勵努力以て益々我林業界の發達を計るべきに非らずや。

ウ何うすればよいか解らなくなつた。近頃の男と云ふものは皆女を女王として拜むて居るじやないか、外に出ては無智な群衆と云ふ暴君の鼻息を窺ひ、黄金の神様に百度参りをして居る。馬鹿々々しい、此處の主人は丸デ蜜蜂の職蜂の様だ、朝から晩まで眞ッ黒になつて甘い蜜を集めてきては、みんな女王に捧げて丁ふ。女王は甘い接吻の代りに辛い、喉の腫れる様なスーブを只一杯しか呉れない、己はスーブどころか毎日眼から火の出る様な小言で耳にタコが出来てゐるんだ。あ、男子志を立て、玄海灘を越けた時はまさかこんなつもりじやなかつたんだがナ、(と益々激昂し腕をさする稍眼目して後氣の付いた様に椅子に起き直り) 『處で此處の主人はあれで仲々會社さつての腕利き、殊に緑女史を迎へてからは所謂内助の勳功が素晴らしいといふ一般の評判だぞうだハッハ……』

文苑

○スヰートホーム(脚本) 坂本生 何事も新なれどぞ購るかな 年の始に朝日拜みて 乾坤一廻轉鳥先づ八方に飛んで歡聲を放てば、人臘月の舊夢を破り清々たる春風の中茲に未の新年を迎へたり。

社會劇「新家庭」

新州義雄一製紙會社員青年紳士 全縁女史一全夫人女子大學出身 鴨川鐵郎一友人音楽家 雲井林作一義雄叔父官吏 全夫人榮子一全 叔母 原木丸太一義雄宅書生 端切た丙一全 女中

第一場

舞臺面、新州義雄新家庭 正面に額、左方に時計、右方にヴァイオリン、中央に卓子、卓上に花瓶、巻煙草の灰捨、卓周に椅子五脚、額の下方に洋書の書架、総て新世帯の氣分に充ちた新作りに見せ掛くること。

第二場

緑女史登場(新しいエプロンを掛け大きな料理教科書を抱へ片手にアルコールランプを持ち卓に近づき本を置き腰を卸して讀始める)

第三場

新州義雄鴨川鐵郎登場(義雄の案内にて陽氣らしく大聲にて話し乍ら入り来る)

緑女史登場(エプロン)を掛けたまゝ、苛々した態度にて義雄の前に進み来り鐵郎の立てるに氣付たる所作をなす)

鐵郎「イヤ再三と云ふと、餘りよくもありませんまい」義雄「ハラハラしながら鐵郎の袖を引き眼をパチ／＼する、女史夫の方に向き直り

女史「た歸りなさい、一体どうしてこんなに遅くなつたんですか? 貴はキツト約束を違はる」

鐵郎「イヤ實わね鐵橋が開いたのでツイ待たされて了つたのです、閉まることすぐ足で漸く歸つて来たワケです」

鐵郎「そので僕もスキ腹を抱へて走つたらツイ方向を誤つて宅へ駆け込んだ様なワケです」

女史「貴方の勞働は小供の遊戯に過ぎないです、妾の苦勞は精神的です、苟も家政の何たるかを御心得ておればモットモツト婦人に敬意を表すべきはづだは、日本人の思想が古くて婦人を奴隷視してゐるから困る、貴方の様に理解のない男程哀れなものはないのです、妾が如何に家政といふことに忠實に熱心に力を込めてゐることをお解りにならないのですか」

鐵郎「イヤ有難う、御免を蒙ります。今日は下宿に卵焼があるんですから」

女史「それはさうでせうが家庭の料理には、(之見よがしたエプロン)の胸を義雄の前

温い家庭の味がありますから、殊に今日は妾が理想的に作しつて見ますから是非試食して下さいな、ごとも下宿などで味はれない甘いスループが出来るんですよ」

鐵郎「僕も此頃妻の料理を食べてからは全く獨身時代の寂寞を忘れて毎日家庭の妙味に酔ふてる位だから君も後學のためには是非ひとつ」

鐵郎「あゝ何時かの松茸飯が實際妙味があつたよ、た陰で一週間は大分腸をやられたよあれが理想後學のためかねマア今日は失敬するヨ何しろフワ／＼する卵焼が待つてるんだからね」帽子を取り立上り出掛けんとするのを義雄は鐵郎の帽子を取り上げ女史は上衣の裾をシツカと掴み三人暫く争ふ」

病 理 維 詠(その一) 宮下更村

胃をいたみ夜半の夢を破られて 悶て居ればはははりの鳴く 死をたもひ生を暮ひてはやすでに いく日経にけむ秋も暮れ行く 奥深く秋を尋ぬるみや人の すぐるを待てり雨そぶる午後 わが顔も水に濡れたる心地して 月に向ひて聞く蟲のこゑ

そのかみは吾すこやかに京への ゆらげる灯こひにけるかも 萩の花音なく散りて暮るゝ頃 胸のいたみの増すを覺ゆる 若き日の一とせ病みてつくるかと 思へばかなし秋の暮れゆく 夕ちかみ魚ごりかへり湯に入れば はやくもみ空明星の輝く 條忽に黒雲去れば駒ヶ嶽 夕映にしていや高く見ゆ

學校便り

▽始業式一月廿一日午前九時より舉行
▽宮川教諭告別式 大正 年 月來長 本校に在職せられたる宮川教諭の告別式は右始業式終了後引續き擧げらる、先生にはこの度松本商業學校に轉任せられたるにて七宮校長の送辭先生の別辭米久保生徒總代の送辭ありて式を終りぬ。翌日午前十一時同先生には松本へ向け出立せられたるを以て職員生徒一同停車場に見送りたり。

二月十一日紀元節ノ佳節ヲトシテ、我擊劍部ニテハ、例年ノ如ク大會ヲ開催セリ。一月二十三日ヨリ、寒稽古ニテ鍊へ上ゲタル猛腕ノ事トテ其試合振リノ烈シサ見ルモノヲシテソノ手ニ汗ヲ握ラセタリ、本日ハ寒氣凜烈タリシニモ拘ラズ參觀人山ヲ築キ近年稀有ノ盛會ナリキ。

劍道部大會の記事

擊劍大會取組ノ如シ 但シハハ勝ハハ分

- 1 ○ 藤井君 10 ○ 長谷川君 × 榎山君
- 2 ○ 松原君 11 ○ 上井君 ○ 高橋君
- 3 ○ 小林君 12 ○ 山中君 ○ 米倉君
- 4 ○ 渡邊君 13 ○ 塚田君 ○ 山崎君
- 5 ○ 本南君 14 ○ 西村君 ○ 福川君
- 6 ○ 片桐君 15 ○ 原西君 ○ 丸山君
- 7 ○ 宮城君 16 ○ 遠山君 25 ○ 伊東君

二月十一日紀元節の佳節を卜して我が柔道部寒稽古終了の式を兼ねて大會は開催せられたる結果は一段の妙境に入りし勇士の面々此處を天晴の舞臺として龍驤麟振の雄々しさ勇ましさ観るものをして握汗の思あらしむるこゝげに幾度なりしぞ、午前十一時一同着席校長より一場の御注意ありて直ちに仕分に取掛りぬ。

柔道部大會記事

大会取組左の如し 第一回三本勝負

- 1 ○ 林森君 ○ 山崎高男君
- 2 ○ 長谷川要治君 ○ 本南克己君
- 3 ○ 西村清志君 ○ 原英雄君
- 4 ○ 今野啓三君 × 渡邊時夫君
- 5 ○ 伊藤傳君 ○ 中島省三君
- 6 ○ 柳澤虎三君 ○ 岡西萬秋君
- 7 ○ 宮下武夫君 ○ 村上道信君
- 8 ○ 福川正三君 ○ 宮城吉雄君

- 9 (富士川金二君)
- 10 (古畑要司君)
- 11 (長田克己君)
- 12 (村上道信君)
- 13 (福川正三君)
- 14 (星加晴夫君)
- 1 (宮下武夫君)
- 2 (宮下武夫君)
- 3 (大原猛志君)
- 4 (數野二郎君)
- 5 (數野二郎君)
- 6 (數野二郎君)
- 7 (花村準則君)
- 8 (村上道信君)
- 9 (村上道信君)
- 10 (星加晴夫君)
- 11 (星加晴夫君)
- 12 (伊東近良君)

士の香を送つてくれるだろう、斯うした内にも、二月十三日本年度掉尾の大辯論會が來年度校友會各部部長の選舉と共に講堂で催された、左に當日熱辯を振るる諸君の芳名を記し活氣ありし論者の爲聊か安評を試みる。

開會の辭 部長 井原君
得意淡然失意冷然 一年 今野啓藏君
得意を得意とせず失意を意とせざる可しと説く處意外の大元氣聽者の方から「怒るな」と出る、初陣としては先づ以て妙面白味
面白味 二年 深澤佐愛君
戰爭が止んで平民政的とかボビエシとか云ふ事が言はれる様になつたので何か通俗的な演題をと思つて考へた末が此面白味だと思はれる處老練な独自の道を聞いて誰もの追隨を許さない、敬服と云ふべしだ。

將來の青年 一年 數野二郎君
柔い調子で「世界に雄飛せよ」と説く、處女演説としては成功の方であらう。
本氣でやれ 三年 眞部寛明君
君としては異常の元氣で聲量にも態度にも一新した處があつた。演題を合致する處があつて好ましい。

學生と農村青年 二年 佐塚甲子君
親のメネを味ふ學生生活の幸福を思ふと共に自己の責任を大いに自覺して怠ることなき様と説く、依然たる論旨感服の外なし、副部長たりし勢を謝す。

二年 中越二郎君
本校の生徒は老人振つていかない、と説く處堂々たり、雙手を擧げて君の説に賛成だ先づ以て現在有望の辯士として君をあげる

精神の弾力 三年 奥村安太郎君
如何に人からヤジラれても直ぐ「コタレル様な人は駄目だ」と説きはしたものの、今幾何かの元氣を欲しかつた。

三年生の爲に 三年 大坪時治君
超然の態度に出づるのは度の得意とする處か將又頑然たる態度か痛快なものだ。

偶感 二年 千田瑞穂君
聲を聞いて其の人を思はせるに足る程華かに明るい君の性格は論旨にもみわた、論議縦横華麗の極、來年度部長として君を得る校友の本懐が思ひやられる。

平和來と學生 二年 小縣球次君
平和來につきて學生の進むべき道着實なりと明快なる辯を吐く、君も本気で渴仰する一人か、乞ふ益々着實なる努力家たれ

偶感 二年 高橋秋穂君
先生と生徒との間をより以上親密にしたいと説き、落付ける態度で辯論の必要より一案を述べ先づ以て今日の花形だ。

偶感 一年 中嶋省三君
實行の人たれと叫びはしたものの、眞紅の顔には瑣の落付もなかつた此れも愛嬌か
大なる希望を待つ 三年 岡庭泰平君
活辯派として謳はれる様なタイプ、失敬な

がらマンナリに輕薄の嫌なきか、
朗吟(本能寺) 二年 千田瑞穂君
なんと云ふ美しい音だ、緩かきだ、珍らしい試として同好者を喜ばせたこと非常だつた。

偶感 校長先生
昔て二高時代の花形論者と承る校長先生、最近辯論部の所感より校風發揚について熱心なる、御述懐を承る。

倍舊の御愛顧 佐藤先生
雜誌部顧問先生として冷く林友を利用せられん事を論じ、三年生に對しては特に愛顧の程、を先生の御期待を承る。

吾が思ひ 一年 高野和夫君
通俗的なエピソードを網羅して最後に、機先を制する米國風を鼓吹す、天晴と云ふべし惜しむらくは辯するに際してなご其大車輪式なるを制せざるや。

斃れて後止まん 一年 片桐英雄君
「場末の墓場に立つた時、流れに面した時郷社の森で合掌した時、夫れ等は總て夜であつた。月は彼等の背景として斃れて後止まんと云ふ偉大なる人物を物語つた」と説く處君は天晴掃情論者として一位にある!

ウ井ルの力 三年 井原邦雄君
普く各國の大雄辯家、大實業家を擧げて因る處意志の確固なるによると説く、論旨明快、掉尾論壇の花形辯士、思ふに今日の白眉?部長として一年銳意盡力せられたる君

閉會の辭 副部長 佐塚君
以上

會員消息
▲矢崎清海君、豊橋歩兵六十聯隊第五中隊第二班に入隊せらる。
▲赤羽 高君 北海道石狩國空知郡下富良野村帝室林野局札幌支局上川出張所富良野分擔區に轉勤。
▲林勘次君群馬縣利根郡片品村東小川山林事務所に移めらる。
▲大洞盛一君樺太豊原支廳元泊出張所に在勤せらる。
▲吉田精一郎君市哇ホノル、府一(郵函九一二)

▲伊藤喜代君帝室林野管理局技手札幌支局業務課勤務を命ぜらる。
▲山崎兵平君宮城縣宮城郡廣瀬村大字上愛子第六號愛子保護區官舎に轉任。
▲安江悦次郎君軍隊内生活を了りて再び山形縣廳林務課に移めらる。
▲長谷部兵治君この度佐竹と改姓せらる。
▲新田稔君朝鮮江原道江陵郡廳に轉せらる。
▲久保田邦治君豊橋輜重兵十五大隊第一中隊第一班に入隊せらる。
▲小原静雄君東京大林區署施業係に轉せらる。
▲井上寛一君宇都宮歩兵第六十六聯隊第十二中隊に一年志願兵として入隊せられた

- ▲水野鎌一郎君卒業を目前にして不幸流
行性風患の爲めに去る十二死去せらるる痛
惜に堪へず、謹みて哀悼の意を表す。
- 林友代領收報告
計金四圓參拾六錢
新家先生謝恩金領收報告
- 金壹圓 樋口 徳一君
 - 金壹圓 田中 榮一君
 - 金壹圓 坂本光太郎君
 - 金壹圓 白井 辰雄君
 - 金壹圓 金田 美作君
 - 金壹圓 岩田 元吉君
 - 金壹圓 佐々木久一君
 - 金壹圓 白木 老雄君
 - 金壹圓 久保田 吾良君
 - 金貳圓 池口 福雄君
 - 金五圓 小羽根安次
 - 金壹圓 堀田 大
 - 金壹圓 以上三君
 - 金壹圓 不 免 修 六君
 - 金五拾錢 高野 薫 見君
 - 金貳圓五拾錢 今井眞二 近藤幸吉
 - 池野萬次郎 喜多村弘

石會根四郎 以上五君
小計金貳拾五圓五拾錢
累計金五拾四圓五拾錢

謝恩金募集締切期限延長廣告

拜啓餘寒尙嚴敷候處各位益御清榮之段奉賀候陳者新嘉生先の謝恩金募集に付ては早速大方の御賛同を忝るゝ難有御禮申上候尙未御賛同之無向を締切期限を來る三月末日迄延長仕候に付此際奮つて御賛同の榮に預り度此段得貴意候也

大正八年二月

卒業生各位 校友會

謝恩金贈呈に付謹告

内藤北村兩先生の謝恩金を前號廣告の通贈呈濟の處其以後に於て内藤先生分として佐竹兵治君不免修六君曰井辰雄君より各壹圓づつ北村先生分として不免修六君曰井辰雄君より各壹圓づつ御送金有之候に付夫々御贈呈の手續を致し候條御諒知被下度候
尙岡西謙三君より内藤夫生分として金五拾錢御寄贈有之候分て當誌へ掲載漏發見に付茲に改めて廣告候也但し全金額を曩に御贈呈濟に付御諒知願上候
謝恩金捧呈の後内藤北村兩先生より別項の通御禮狀有之候

大正八年二月廿二日印刷

大正八年二月廿五日發行

編輯兼發行人 安井 夫 印

長野縣筑摩郡福島町四〇四番地

長野縣西筑摩郡福島町五七〇番地

大正八年一月 北村 正 雄

各位

謹啓各位愈御勇健之段奉賀候陳者 年三月小生都合ニ依リ教授囑托ヲ辞シ候處多年重要ノ職ヲ汚シ諸兄ニ對シ矢禮ニノミ相過キ候ニモ關セス此程過分ノ思召ニ預リ感銘ノ至ニ御座候即チ御惠賜リ金員ハ其筋ノ許可ヲ受ケ正ニ悉拜受致候 山林學校在職ノ儀ハ小生閱歷ノ中誠ニ記念スヘキコトニ有之候ニ付御芳志ト共ニ長ヘニ當時ヲ偲ヒ度依テ東京畫伯山本清邦氏ニ花鳥山水人物等十二ヶ月ノ繪畫揮毫ヲ依頼致候 多分三月中ニ出來ノ筈ニ有之其上ハ相當表装ノ上六曲一雙之屏風ニ仕立度候 繪畫ハ小生性來ノ嗜好ニ有之又同畫伯ハ新進氣鋭將來實ニ有望ノ士各位ノ將來ニ傍觀タルノ感モ有之其作品ハ諸兄ノ前

大正八年二月十八日 內 藤 善 助

木會山林學校校友會御中

謝恩金募集廣告
拜啓餘寒尙甚敷折柄各位御清祥の段奉賀候陳者永年當校教諭並舎監として校務の爲又寄宿舎の爲御盡瘁下されたる宮川先生には今般御都合により退職せられ候に付ては此際謝恩金を呈し聊先生の勞に酬ひ度と存候間差記御諒知の上何分の御寄贈に預り度此段得貴意候也
追五先生には御退職後直ちに松本商業學校教諭として御就任被遊候に念付の爲申添候
記
一 振替にて御送金と場合は東京一七六〇番木會山林學校宛のこと
一 締切期日は來る四月末日限のこと
一 領收證は一々不差上林友誌上にて御報告可申候
大正八年二月 校友會
卒業生各位

長野縣西筑摩郡福島町五七〇番地

長野縣西筑摩郡福島町二八〇番地

印刷所 川崎印刷所

【定價壹部參】